

「21世紀COEプログラム」(平成14年度採択) 中間評価結果表

機 関 名	名古屋大学	拠点番号	D08
申請分野	人文科学		
拠点プログラム名称 (英訳名)	統合テキスト科学の構築 (Studies for the Integrated Text Science)		
研究分野及びキーワード	〈研究分野: 史学〉(美術史)(仏文学)(統語論)(史科学)(文化人類学)		
専攻等名	文学研究科人文学専攻		
事業推進担当者	(拠点リーダー) 佐藤 彰一 教授 他 14名		

◇拠点形成の目的、必要性・重要性等：大学からの報告書(平成16年1月現在)を抜粋

<本拠点がカバーする学問分野について>

本プロジェクトは、歴史学、文学、美術史学、言語学、哲学、人類学の6分野を包摂している。これらの領域の対象である文字・言語・図像・身体所作の記録を「テキスト」として読み解き、その背後に横たわる「普遍文法」を抽出することを目的としている。前世紀までの学問動向は、それぞれのディシプリンの独自性を深く掘り下げることに主眼がおかれた。だが1980年代に開始されたコミュニケーション様式の根本的変革は、そうした動向に転換をせまっている。本プロジェクトは異なる「テキスト」形式を統べる共通の原理の探究という学際的方向に180度方向を変えた。

<本拠点の特色及びその目的等>

本拠点の特色は、人文科学における学際的研究の可能性を「テキスト学」として探究するところにある。わが国の人文科学研究の歴史のなかで、個々の単独分野での研究機関は存在したが、最も本源的な対象である「テキスト」をめぐる、多角的かつ学際的な研究は初の試みである。その成果の発信において、可能な限り国際的な学術言語を採用することにより、本拠点の水準を海外で広く認知せしめることを意図している。

<COEを目指すユニーク性>

本プロジェクトの知的系譜は、「テキスト」形態の差異を越える普遍コードを見いだそうとしたA・ヴァールブルクの夢に連なる。彼の構想は、現在ではロンドン大学所蔵の蔵書・資料群として残されているにすぎず、文字記録・図像メッセージの統合的解読の計画は頓挫している。世界的に見ても本拠点のような研究プロジェクトは皆無である。本研究プロジェクトと精神を同じくするものとして、ヨーロッパ科学財団が新たに発足させた5年プロジェクト「人間、言語行為、言葉」が挙げられる。本拠点の構想はこうした先端的な潮流に倣す動きである。

<本拠点のCOEとしての重要性・発展性>

人文科学の最も核心的分野としての文字による記録だけでなく、図像表現、身体所作なども文字と同じレベルでコミュニケーション媒体と捉え統合的に研究しようという本プロジェクトは、現在世界の動向の中では革新的であると自負している。すでに開催した3回の国際研究集会に招聘した第一級の研究者たちがこれを認めていることは、集会のプロシーディングを参照すれば納得されよう。本プロジェクトが世界発信のために創刊した欧文定期行物は、今後広く海外の投稿者を募り国際的な学術交流のフォーラムとして機能させる計画である。

<本プログラムの事業終了後に期待される研究・教育の成果>

1) 国際的に先端的な「テキスト学」の研究センターの創設を実現しうる。2) 本プロジェクトの推進担当者、研究員、研究を支援した大学院生が、国際水準の研究のスタイルに関しての規範、研究成果の発信方法、その形式と質に関する正しい認識を獲得することが期待される。3) 本プロジェクトのために創設準備中の「電子テキスト学」の講義は、学生に新しい知的スキルを訓練し、テキスト科学の内実を一段と豊かにする。

<背景となる当該研究分野の国内外の現状と動向、期待される研究成果と学術的・社会的意義、波及効果等>

本プロジェクトと類似の統合的研究は、今までのところ国内外の関連分野には存在していない。人文科学において「普遍的原理」の探究は、リッカートの古典的分類が示すように科学認識論において排除されていた。だが近年自然科学においても、2002年のコレージュ・ド・フランスの年次シンポジウムで「諸科学における真理」をテーマに掲げたように、「真理は構築されたもの」として上記の認識論を打破する、文理融合的な発想での議論が盛んになされるようになった。本プロジェクトは人文科学の側からこうした新たな科学認識論の探究を模索しようとする画期的な研究プロジェクトである。

機 関 名	名古屋大学	拠点番号	D08
拠点のプログラム名称	統合テキスト科学の構築		

◇ 21世紀COEプログラム委員会における評価

(総括評価)

当初目的を達成するには、下記のコメントに留意し、一層の努力が必要と判断される。

(コメント)

本プログラムは、文字・言語・図像・身体所作を「テキスト」として捉え、そのテキスト学的世界的拠点形成を目指したものである。拠点リーダーのリーダーシップのもとで、欧文学術雑誌が刊行され、実のある国際会議が開催されており、テキスト学の拠点形成が進行しつつあると判断される。

しかしながら、「統合テキスト科学」の構築という大目標に対して、体系化された理論的・実証的成果が創出されるのか、依然として不安が残る。統合テキスト科学の理論的研究をいっそう進めると同時に、実証的な事例研究を早急に推進する必要がある。